

令和 6 年 6 月 30 日現在

機関番号：84419

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00204

研究課題名(和文) 中国・五代十国時代(10世紀)の仏教工芸研究 - 制作技法による視覚的效果とその意義

研究課題名(英文) study of the buddhist crafts in five dynasties and ten kingdoms period (10th century) in china -visual effects and the significance of production techniques

研究代表者

瀧 朝子 (Taki, Asako)

公益財団法人和文華館・その他部局等・学芸部課長

研究者番号：90416264

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：金属工芸の線刻技法は工具(鑿)の種類および施し方から主に「毛彫り」・「蹴り彫り」などに分けられる。しかし、本研究により、作品を詳細に調査・観察するとさらに表現方法は多岐にわたり、また、仏教工芸の種類によっても用いられている技法に偏り(傾向)が認められることが見てきた。制作技法と表現効果は密接に関係すること、とくに、仏の顕現が求められたと考えられる線刻鏡ではそれにふさわしい技法が用いられていたことを具体的に確認するに至った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

仏教においては、「莊嚴」(仏や仏の教えを厳かに飾ること)は功德とされる。そのために仏教にかかわる造形物では、どのような視覚的效果が求められ、材質と技法が選択されたのか、背景にある思想と関連付けながら考察する必要があると考える。本研究では、視覚的效果をねらった線刻技法が用いられたことが想定された線刻鏡の線刻技法と表現の関係の関係を基軸に進め、その結果、中国国内における仏塔へ奉納する行為についての考え方および、東アジアにおける交流史において重要な観点を得たと考えている。

研究成果の概要(英文)：Line engraving techniques in metal crafts can be mainly divided into "hair engraving" and "kick engraving" based on the type of tool (chisel) and the method of application. However, detailed investigation and observation of the works in this study revealed that there is a wide range of expression methods, and that there is a bias (tendency) in the techniques used depending on the type of Buddhist artifacts. In particular, it was confirmed that the techniques used for line-engraved mirrors, which are thought to have been required for the manifestation of the Buddha, were appropriate for this purpose.

研究分野：五代十国時代の美術、仏教工芸

キーワード：金属工芸 呉越国 遼 彫金 五代十国時代 仏教工芸 莊嚴 錢俶

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

仏教工芸の材質に注目すると、その多くには金・銀・銅などの金属が用いられている。その理由には耐久性や大量製作のためであることが考慮されるが、視覚的観点からは金属の持つ色や光沢が仏や教を荘厳する意味を持ち、仏像を表すのに適した素材と見なされたためと考えられる。

中国・五代十国時代(10世紀)に現在の浙江省周辺を統治した呉越国は、国王を筆頭に仏教信仰が篤く、金属工芸の高い技術を持って塔形阿育王塔(法舍利の容器)や鏡像(線刻鏡)など新しい型の仏教工芸を残している。呉越国で制作された金属製の仏教工芸は日本や朝鮮半島にもたらされており、東アジアにおける仏教を介した交流を示すものとして捉えることができ、これまで歴史・美術史の観点から学術的な論考が行われてきた。その一方で、日本や朝鮮半島において制作されている同様な作例との技法上の比較については、視覚的な表現効果を見据えた論考が希薄であり、それらの特徴ある造形について技法から読み解いていく必要があると考えた。

### 2. 研究の目的

本研究は、中国・五代十国時代(10世紀)の仏教工芸について制作技法とその視覚的効果に着目して意義を明らかにしようとする内容である。金属の性質が持つ視覚的効果を生かすために、どのような技術が用いられたのか、金属工芸の制作技法とその視覚的効果に着目することで、仏教工芸への新たなアプローチとすることを目的とした。

### 3. 研究の方法

- (1) 歴史文献史料を収集し、金属製の仏教工芸制作の実態およびその制作背景を考察した。
- (2) 日本・中国・台湾・アメリカにて現地調査を行い、金属製の仏教工芸および関連する中国・五代十国時代を中心とした唐～宋時代と、朝鮮半島・高麗時代、遼の作品を実見、熟覧調査および写真撮影による画像の収集を行い、これらをもとに、技法とその視覚的な表現効果について詳細な観察調査と分析を行った。

本研究は金属製の仏教工芸を主な研究対象としているが、造形作品は異なる材質によるものであっても制作技法や表現技法に共通性や影響関係が認められるものが少なくない。研究期間の前半期はコロナ禍により海外での現地調査が困難であったこと、五代十国時代の作品が日本には少ないことから、国内での現地調査では調査範囲を広げ、金属製の作品のほか、石造や木版印刷なども調査対象とした。結果として、工具を用いた彫り痕や打ち出し痕を比較観察することにより、材質の持つ性質と技法について考察を深めることができた。





- (3) (1)・(2)による調査を踏まえて、美術史的な観点から実証に基づく考察を行った。

### 4. 研究

- (1) 仏像・仏具類の施文技法についての観察と考察

五代十国時代や遼時代、朝鮮半島の金属作品を中心に、仏教彫刻(石仏および金銅仏・鉄仏)および関連する作品の実見調査を行い、使用されている鑄造および彫金技法について詳細な観察調査を行い、金属工芸の装飾技法については、鉄製の作品には主に型を用いた鑄造による凸線文(A)、銅製の作品には鑄造時の凸文のほか、彫金技法には小さな円文

を打ち出す「魚々子」(B- )のほか、半球状に凹文の打ち出し(B- )や、金属の表面に魚々子に擬して荒らす打ち痕(C)など多様な工具が認められ、これらはあらわされる文様と、その表現するところによって、それぞれに異なる視覚的効果につながることを確認した。用いられる技法が異なる理由として、材質の選択とともに、仏像や仏具の「何を、どのようにあらわそうとするのか」という目的の相違が少なからず影響していると考えられる。一部の技法の画像を次に示す。

作品記号	A	B	C
技法部分の拡大写真		 	
材質	鉄	銅製鍍金	銅製鍍金
地域・時代	中国・五代十国時代	遼(契丹)	朝鮮・高麗時代

#### (2) 金属製小型仏塔の施文技法についての観察と考察

中国の金属製小型仏塔では五代十国時代の呉越国で製作された銅製・鉄製・銀製の仏塔(阿育王塔/錢弘俶八万四千塔)が特色ある作例としてあげられる。本研究では、そのうち、銀製の仏塔に類似作例が現存することから、これらに焦点を当てて調査を行った。

その結果、近似する造形であっても、細部の表現や技法には相違点の確認され、これが視覚的な表現効果に大きな影響を与えていること、またそこから制作年代について考慮すべき観点を見いだすことができた。

#### (3) 鏡面に図像をあらわす技法についての観察と考察

日本および中国、朝鮮半島で製作されている鏡像/線刻鏡は、青銅鏡や銅板の表面に仏像などの図像が線刻されたものである(日本と韓国の研究史では「鏡像」、中国では「線刻鏡」と呼ばれている)。本研究では線刻鏡の線刻技法と表現の関係を基軸と考えており、現存作例で制作された時代がもっとも上がる作例を有していることから、主に中国の線刻鏡作例を検討対象として調査を行った。その理由として、鏡像/線刻鏡は鏡面にあらわされた仏像や図像は、鏡面という光の中に顕現すること、あるいは光の中に感得することを求められたと考えられ、その視覚的効果をねらった線刻技法が用いられたことが想定されたからである。

本研究にて調査した作例のうち、それぞれ異なる場で用いられ、発見されていた二面の線刻鏡について、線刻技法の詳細な観察調査から、ほぼ同時期に制作された非常に近い関係にあると考えられることが確認できた。

#### (4) 制作技法と視覚的効果について

仏教においては、「莊嚴」(仏や仏の教えを厳かに飾ること)は功德とされる。そのために仏教にかかわる造形物では、どのような視覚的効果が求められ、材質と技法が選択されたのか、背景にある思想と関連付けながら考察する必要があると考える。

金属工芸の線刻技法は工具(鑿)の種類および施し方から主に「毛彫り」・「蹴り彫り」

などに分けられる。しかし、本研究により、作品を詳細に調査・観察するとさらに表現方法は多岐にわたり、また、仏教工芸の種類によっても用いられている技法に偏り（傾向）が認められることが見えてきた。制作技法と表現効果は密接に関係すること、とくに、仏の顕現が求められたと考えられる線刻鏡ではそれにふさわしい技法が用いられていたことを具体的に確認するに至った。

とくに(3)については、中国国内における仏塔へ奉納する行為についての考え方および、東アジアにおける交流史から重要な観点を得たと考えている。本研究の成果については個別および全体像について今後、まとめて成果報告として公開する予定である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 瀧朝子	4. 巻 1541
2. 論文標題 唐・鍍金龍池鴛鴦双鱼文銀洗	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 國華	6. 最初と最後の頁 42-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 瀧朝子	4. 巻 274
2. 論文標題 呉越国の文化と美術	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 4-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 王 宣艶著、瀧 朝子訳	4. 巻 274
2. 論文標題 呉越国銀簡・金龍考釈	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 131-155
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 王 牧著、瀧 朝子訳	4. 巻 274
2. 論文標題 五代・呉越国時代の銅鏡：五代の銅鏡に関する問題とともに	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 195-219
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 瀧朝子	4. 巻 第138号
2. 論文標題 日本における越州窯青磁の出土例と需要に関する一考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大和文華	6. 最初と最後の頁 29-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 瀧朝子	4. 巻 -
2. 論文標題 大和文華館所蔵 朝鮮半島の金属工芸2点について - 金銅経筒と鉄製銀真鍮象嵌雲龍文笛 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 古代～中世の「鍮石」と「真鍮」の研究 - 金に等しい価値があったころ - 科研報告書 (研究代表者西山要一)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 瀧朝子	4. 巻 336
2. 論文標題 映現真幻「鏡」界	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 典蔵 古美術	6. 最初と最後の頁 86-93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 瀧朝子
2. 発表標題 鏡像 / 線刻鏡の考察 図像を見いだす
3. 学会等名 京都大学人文科学研究所「見えるもの」や「見えないもの」に関わる東アジアの文物や芸術についての学際的な研究班」2020年度第1回研究会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 瀧朝子編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 317
3. 書名 呉越国 : 10世紀東アジアに華開いた文化国家	

1. 著者名 外村中・稲本泰生編 瀧朝子ほか共著	4. 発行年 2024年
2. 出版社 勉誠社	5. 総ページ数 746
3. 書名 「見える」ものや「見えない」ものをあらわす 東アジアの思想・文物・藝術	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------